

2024年度大学院修士課程一般入学試験（第Ⅲ期）問題

研究科名	科目名
文学研究科 国際言語教育専攻	日本語（No.1）

問題Ⅰ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今の時代、そしてこれからのサイバーコミュニケーション全盛の時代では、異なる価値観や異なる文化背景を持った人と出会ったときに「どうにかする力」が重要になります。それも、機転を利かせるという「瞬発力」よりは、「粘り強い」コミュニケーション能力です。そのような状況に耐えて切り抜ける力①を、私は「対話力」と呼ぶこともあります。

よく「対話とディベートはどう違うか②」と訊かれます。ディベートでは、AとBが議論をして、どちらかが勝ってどちらかが負けます。Aが勝った場合は、AはAのままで、BがAに変わる。それに対し対話では、お互いが歩み寄ってお互いが変わります。AもBも変わるということを前提として議論を進めるのです。

ヨーロッパでの仕事の際に、三十分ないし一時間ほど議論する場合、大体日本人のほうが計画性があるから、こちらに近い意見に落ち着く③ことが多い。その際、例えば「それ、三十分前に私が言ったこととほとんど同じだ」と言うと、ヨーロッパの演出家は必ず、「いや、これは二人④で出した結論だ」と言う。その、二人で出した結論だということが大事なんです。

逆に、日本人との混成チームで議論を行うと、日本人サイドには、その三十分が耐えられない⑤のですね。「もういいじゃん、これで。こっちのほうが絶対合理的じゃん」と議論を切ってしまう。多くの日本人は、なぜ彼らがそういう主張をしているのかということを考えようとしません。

日本人は議論を続けると、諦めるか、キレちゃうか、どちらかになってしまいます。国際社会で生きていくには、その三十分の体力が必要になります。私はこれを「対話のための体力⑥」と呼んでいます。コミュニケーションの技術は後からでも身につけることができます。大学生や大学院生でも、社会人でも。でも、対話のための基礎体力は、小学校のときから対話を延々行うといった訓練をしないと、なかなか身につかないと思います。

これからは、日本人同士でも価値観が大きく異なっていくので、「日本人ならわかってよ」「日本人なら察してよ」という暗黙の要求は通用しなくなります⑦。そのような状態で対話する体力も無くなると、なあなあで終わってしまう⑧から、どんどん国力が衰退していきます。今の国会みたいな感じですね。対話の体力が、国力に直結する時代なのではないでしょうか。

平田オリザ（2009）『コミュニケーション力を引き出す』PHP新書, pp. 35-37

問1 _____①の内容を説明した文として適切なものを次の中から選びなさい。

- 1) サイバーコミュニケーションであっても、相手の主張に対する理解に努めること
- 2) 異なる文化的背景を持つ相手に、自分の考えをしっかりと理解させること
- 3) 考え方の違う相手に対して、機転を利かして勝つまで議論し合うこと
- 4) 価値観の異なる相手と結論が出るまで粘り強く語り合うこと

問2 _____②に関する筆者の意見を簡潔に述べなさい。

問3 _____③が何を意味するのか、本文の内容に基づいて説明しなさい。

問4 _____④が何を指すのか、本文の内容に基づいて説明しなさい。

問5 _____⑤が何を意味するのか、本文の内容に基づいて説明しなさい。

問6 _____⑥の内容を本文の内容に基づいて具体的に説明しなさい。

問7 _____⑦の内容とその理由を、本文の内容に基づいて説明しなさい。

問8 _____⑧の内容をわかりやすく説明しなさい。

問9 筆者が考える日本人の「コミュニケーション」の課題を整理し、100字程度でまとめなさい。

2023年度大学院修士課程一般入学試験（第Ⅲ期）問題

研究科名	科目名
文学研究科 国際言語教育専攻	日本語（No.2）

問題Ⅱ 次の本文を読んで後の問に答えなさい。

ところで、^A日本人はよく謝る、といわれることがある。それは欧米人と比べてという意味である。純粋に相手に迷惑をかけた場面だけでなく、感謝すべき場面での謝罪表現の使用も、欧米人に比べた場合の日本人の特徴だとされることがある。（略）

感謝表現とは少し違うが、^B「ごくろうさま」という言い方がある。相手をねぎらう表現と考えられる。一五年ほど前、この表現の使われ方について調査をしたことがある。その理由は、「ごくろうさま」を目上に使ってもいいのか、ということがしばしば話題になったからである。そうした話題が口にされるといことは裏を返せば、目上にも使う人がいる、という事実もまた存在した、ということである。よく引き合いに出されたのが、^C会社で取引先から帰ってきた上司に対して、「ごくろうさま」と言えるかどうか、という点であった。

我々の調査の結果、「ごくろうさま」の面白い性質が判明した。単純に目上には使えないとはいいい切れないのである。以下に、整理して述べていく。

このことばは^D文字どおり、相手の「苦労」「労苦」をねぎらう表現である。したがって何か実質的な労苦がないときに使うのは、いかにも不自然である。たとえば、テーブルの上に塩の瓶があるが手が届かないので、隣の人に取ってもらった。このときに「ごくろうさま」は奇異だろう。（略）

実質的な労苦があるとき、たとえば部下が上司の荷物を運んでくれたときには、上司は部下に「ごくろうさま」と言える。しかし、相手に実質的な労苦があれば常に使えるわけではない。上司が部下のために、営業活動の方法を時間をかけて教えてくれた、というときに「ごくろうさま」と言えばきわめて失礼な感じがするだろう。「上位者に向かって言うのは失礼だ」という指摘に関しては妥当な面もある。しかし、上位者に対しては常にダメかという、そうでもない。上司が東北の大震災のためにボランティア活動をした、という話を聞いて、「それはごくろうさまでした」と言うのは、そんなに違和感がないだろう。

ここでは、話し手自身が直接的に利益を受ける場面かそうではないかが、キーポイントになるようである。話し手自身が利益を受ける場合は、「ごくろうさま」と言ったら非常に失礼な感じになる。しかし、ボランティア活動の場合は利益が直接話し手である部下には向けられてはいない。そうすると「ごくろうさま」も許容されるようである。

「ごくろうさま」の誤用が問題になるのは、受益者が曖昧な状況であると考えられる。前述の会社の上司が取引先から帰ってきた、という場合に、部下のほうは自分の利益というより公益、と考えて「ごくろうさま」と言ってしまう。しかし上司から見たら、「君たちのために仕事をしてきた」という意識もある。「それなのに上司に向かって『ごくろうさま』とは何ごとだ」と考えてしまう。（略）

「おつかれさま」も、その字義的な意味から推し量れるように、相手の労苦をねぎらう、というニュアンスではあるが、「ごくろうさま」に比べると、地位の低い者から高い者へと使いやすいようである。すなわち、部下が営業から帰った上司に対して、「おつかれさま」ということは許容される。つまり比較的公益性があり、自分が直接利益を受けるのではない、という状況なら、地位の下の者でも使用可能なのである。少なくとも、「ごくろうさま」を使うよりは無難である。

ただし、「おつかれさま」は、自らが直接的に相手の恩恵の対象にはならない。この点は「ごくろうさま」より徹底している。自分が目上であっても、自分のためにしてくれたことには「おつかれさま」は言いにくいように思う。

2023年度大学院修士課程一般入学試験（第Ⅲ期）問題

研究科名	科目名
文学研究科 国際言語教育専攻	日本語（No.3）

-
- 問1 **A** _____ とあるが、あなたの国の人たちと日本人を比べるとどうか、本文の内容を踏まえながら、自分の考えを加えて150～200字で答えなさい。なお、具体的な例を示しながら答えること。
- 問2 **B** _____ を筆者はどのような言葉だと説明しているか、本文の内容をまとめなさい。
- 問3 **C** _____ の答えは何か、本文に即して答えなさい。
- 問4 **D** _____ と類似した意味を持つ言葉を本文中から探し、答えなさい。
- 問5 「おつかれさま」と「ごくろうさま」の共通点と相違点とは何か、本文の内容に基づいて説明しなさい。
- 問6 挨拶表現を日本語教育で教える場合、どの段階で、どういうものを、どう教えればいいのか（注意すべき点など）。自分の考えを400～600字で述べなさい。